

別府大

NOV. 2 1, 196

佐伯文談

第七十一号

「郷土史研究」  
通算第九十三号

昭和四十年十二月十五日施行

佐伯史談會

書林所 佐伯市大字網豆字龍藏寺 神代方

論說

# 佐伯氏四百年の歴史

副會長 羽柴

弘

去る十一月二十九日、わが佐伯史談会は、市内福垣の古刹龍護寺に、大神盤佐伯氏御歴代の位牌を納めた。  
この日はカムラ日向北川村の顛から、惟治公の首を祀る「おとうさま」に奉仕する同地老人クラブの代表、須藤、小野、山岡三氏を迎えて、本会は高木会長以下会員十数人参集、苦杉作職を導師として午前十時から本堂で新しい位牌をまつり、ハコモ嚴肅に読経供養が行われた。  
そうして境内にある佐伯惟真の墓にもうて、庫裡でしばし梅牟礼城や佐伯惟治の御最期などについての史談と交わして、懇親の昼食を共にしたのであつた。

私共はこゝにことばのよな意義を思ひ、今後佐伯地方の中世の歴史研究を、どんな方向に展開すればよいのか考案を試みたい。」  
「あらうか。いささか考案を試みたい。」  
「わが佐伯地方では、江戸時代に於ける毛利藩政について、大変な弊政、濫權政等があり、又地方庄屋文書などを統合して

戰記物語や伝承の中二  
郷二社、そして日向に  
六社鶴野尾神社などと  
祀られている惟治につ  
いてすら、佐伯氏は自  
らハ手で墓所を祀つて  
いない。大友家に対する  
遠慮など考えられぬ  
こともないが、その供  
養塔する僅かに下堅田  
石打戸一基あるのみで、  
他は悉く江戸時代に入  
って建てられ古もので  
ある。思うにこれは当  
時（佐伯氏時代）の世情  
が戦国争乱で明け暮れ  
して、ひいて、しづかに先

本  
号  
内  
容

電  
肥後下落方大雅宗家之統率(馬場一二二  
研究 佐伯山田松歩(山)山本保一五  
研究 後人之交述(村柴弘)一一一九  
「赤木哲丈在座文書の肩書き(主)」  
研究 古(漢)八下(ム)・安部力(ム)一一三三  
「赤泊藩政中の士人書翰」  
蘇 宇佐義方(社寺)行(字)伊集屋雅昌  
佐介 繩正公園(大慈院)詩碑  
(元田玄齋恒太)  
集会案内・贊助者有样受  
受賞前大二二 岁末雅致 一七八

「祖を帝と如き相應が整ひしられどか、或はその余裕があるかお左もひであろう。」

それにしても佐伯氏及初代惟庸以来、永く堅田ノ山宇山ノ身をり、或ひ及上城寺田ノ目とくに居住していたであろうと思われるに、その歴代の墓所らしくものほどこれも女い。もつとも、室町時代或は元和時代のものと推定される丘輪塔や宝塔の類、全くないではないが、その殆んどは記録がなく、誰か何時ころこの村里に残つていたが女など類推するには実に不便である。

それは今から僅か数百年遡つた時代であるのに、時代の流れといふものはかくも歴史と湮滅するものである。無理もない、明治時代、いや昭和になつてでも、もう二三十年遡つた前のことか薩摩のわからんようになつてゐる。こゝより歴史記録及、資料の散佚失はつてどんどん忘れ去らる、気がついた時はすでに遅く、もう全く取り跡がなくなつてゐる。

こゝよりを數きをし、じと感していた矢先、去る十一月二十八日私共は芸術舞大放送中野勝能博士の大神姓佐伯氏の源流と題する講演をきいて、多大の感銘を覺えた。そしてその中で私は特に豊後武士团の棟梁として勢威を張つた繩方惟宗について、改めて教えられた。わが佐伯氏の初代惟庸以下歴代の当世方に於ける勢威は、繩方惟宗の宇佐以来のそれを忘れず、あちよくは又昔日の如く豈前豊後全域を風靡しようとの野望あつてのこと、日本がつたか。時は下刻上の風潮最も旺ん女時代であつた。さればしばらくは大友氏の強大な麾下に甘んじ、或は長駿弘安の役に筑前博多附近に戰い、或は南北朝のころは筑後川の戦に参加し、又は重口で敗後に出陣し、意恐よく兵力を左くおえ、

お加佐伯勢は漸次恐畏の勢力となつて、左めであろう。かような情勢の時に堅田表に中國大作勢の来慰があつたか、実力と土つてこれを擊破した。その後とうけ左第十四代佐伯惟治。祖先諸方惟宗の勢威を思つて、夢よもう一度とひそかに野望をもやし左であらうことか推察され石が、これとて裏付けを正確な史料を知らない。そして失意の裡に日向に落ち、尾高知の峯に於ける終末となつ左が、悲壯なことドラマは佐伯の族民の恩慕をもつて永く語りつがれて来たが、今も断くそれも薄れつたあるのであるまいか。

十二代惟教父子が有力な大友勢の部将として日向高城への進撃と敗戦、佐伯勢は不幸にして潰滅的打撃を受け左が、天正十四年（一五八六年）青年城主佐伯惟定の奮起による堅田合戦、見事馬連勢を擊破して勝ちすくよな報復と果して、佐伯勢の健在は示されたのであつた。

こゝより悲哀と歡喜の交錯の歴史の中に、私共の先祖達は番正の流れを汲み、毎年礼を仰いで約四百年の時をすごしておつた。

私はここまで思いを進めて、こゝ度佐伯氏十四代、それに梶原諸方惟宗を含せて「大神姓佐伯氏」と呼んでその位牌を、ゆが生深い菩提所龍護寺に納め左。まことに機宜に適したことはあるまいか。且て山本有明が主君惟宗の菩提を奉はせばとて結んだ龍護寺に、そへ惟宗と佐伯氏歴代の位牌が詣つた。これが私共は中世における佐伯氏四百年の歴史を追求するポイントとし左い。

佐伯氏の歴史は、佐伯の山野と共にあつた。そしてその山野には刻るとこころに佐伯氏と共に生きていた庶民の哀歎があつた。そこに私共は思念をこめて、これからこそ佐伯氏十四代四百年の姿を追憶しよう。これが私共佐伯史談会へ費すとくめようではないか。